

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 特集 アートが開くコミュニケーション  |
| Author(s)    |   |
| Citation     | 臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 4-5  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/71165">https://hdl.handle.net/11094/71165</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

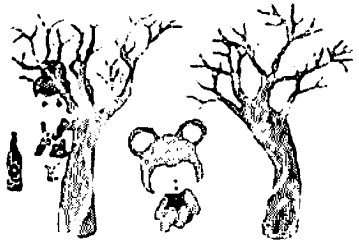
特集

アートが開く

コミュニケーション

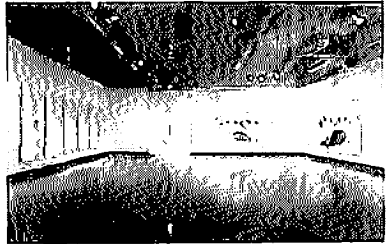


イラスト 山本麻紀子

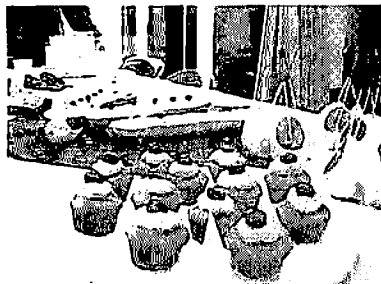
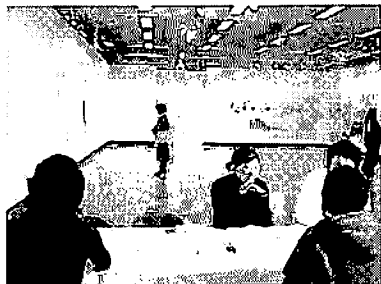


今回の特集はアートが開くコミュニケーションと題して、絵画、ダンス、映画といった芸術が持つ力に刺激されて生み出されたコミュニケーションの現場からの報告をお送りしたいと思います。

臨床哲学研究室では、哲学カフェ、ソクラティック・ダイアログなど、哲学の専門家ではない人々とさまざまなテーマで哲学的な対話をする試みをおこなっています。こうした対話では、「言葉」が中心的な役割を果たしてきました。言葉で与えられたテーマに基づいて、言葉で語られた経験を共有することから参加者が共に考えることを始めます。海外では、こうした言葉だけではなく、哲学的な対話のテーマとして映画や、絵画を用いるということが行われています。(これについては、フランスで映画を題材にした哲学カフェ、「シネ・フィロ」を行っているダニエル・ラミレスさんから寄せられた文章とシネ・フィロレポートによって知ることができます。) 今回のメチエは、絵画やダンス、映画など、感性的な経験を共有することをもとに対話することについての特集です。



2003年10月には京都造形芸術大学内のギャラリーでの展覧会「紅をさす」において、われわれ臨床哲学研究室のメンバーがファシリテーターになって観客参加型のギャラリー・トークを行い、同11月には大阪の應徳院で開催されたイベントではダンスワークショップに接続して哲学カフェが行われました。これらの企画に参加してくださった皆さん、アー



ティスト達から、アートをテーマにした対話の感想がよせられています。感じることを言葉にすること、アートを誘発されて生み出される対話のダイナミクスをそれぞれが個性的な表現で切り取ってみせてくれました。また、アートを題材にした対話というような活動から出発して、地域に根ざしたコミュニケーションの場をどのように作り上げていくかということについて、臨床哲学の活動にも場を提供して下さっている應典院のスタッフの方へうかがうことができました。

院生の中には、展示会の企画にボランティアとして関わることを通じて、哲学を学んでいる学生がアートの現場でなにができるのかということ考えた者もいます。彼女の感想は現場にでることのとまどいを素直に伝えています。その後彼女はそこで出会ったアーティストと高校での哲学の授業を行うという形でさらに活動を広げていっています。高校生達は、しがつめらしい言葉のゲームよりも、日常のふとした場面に「おもしろさ」を見つけるアーティストの軽やかさに共感し、一緒に手や頭を動かしてひらめきを形にすることに面白さを見いだしたように思えます。哲学とアートが組むことによって何ができるのか、という問いに対してはまだまだ答えはできませんが、感性やからだにダイレクトに訴えかけるアートの力を借りることで、かたくなるしい哲学的な対話は刺激を受け、活性化することは確かです。こうしたアートの力を借りて生まれた対話が「哲学的」と呼べるものなのか、そこまで深まっているかどうかはまだまだこころもとないのですが、こうしたアートと哲学が共に対話に取り組み試みはようやく端緒についたところ です。

今回の様々な企画は、アーティスト、展示会や企画を担当して下さった方、企画や演出にさまざまな形で協力して下さった皆さんとのコラボレーションで実現しました。今回の特集では、企画に様々な形で関わってくれた皆さんの感じたことを掲載するように努めました。そうすることによって、アートと哲学とのタッグという異種格闘技的なこの試みが立体的に見えてくればと思っています。